

大阪でのモンゴル語教育100年の歴史を振り返って



海外交流

塩谷茂樹*

Looking Back on 100 Years of Mongolian Language Education in Osaka

Key Words : 100 Years, Mongolian Language Education, Osaka

はじめに

わが大阪大学外国語学部モンゴル語専攻は、1921年(大正10年)開校以来、2021年で創立100周年を迎えたが、1922年4月にスタートさせた9言語(東洋4言語、西洋5言語)の一つである由緒ある専攻語である。その間、草創期の大阪外国語学校・蒙古語部(1922年4月~1944年3月)、大阪外事専門学校・蒙古科(1944年4月~1951年3月)、大阪外国語大学・蒙古語学科、後に1962年からはモンゴル語学科(1951年4月~2007年9月)、さらに統合後は、大阪大学・外国語学部モンゴル語専攻(2007年10月~現在まで)と変遷し、今日に至っている。

三年制の専門学校時代がほぼ30年、その後「大阪外国語大学」という名での四年制の大学時代が56年半、さらには「大阪大学」との統合後、2021年4月の100周年時点で13年半という運命をたどり、組織・名称の変更があったものの、本稿では、一貫性を持たせる呼称として、敢えて「大阪でのモンゴル語教育」とした。

モンゴル語教育の沿革

1922年4月に最初のモンゴル人教師として、中国内モンゴル出身のモージンガが、東京外国語学校より本学に迎えられ、大阪におけるモンゴル語教育

の礎が築かれた。その後、フルンガ、エルデムバートル、スンプルバト、ウルジートの内モンゴル出身の四人の先生が、戦前・戦中・戦後数年間(1920年代から1940年代末まで)のほぼ30年近く、最も苦難の時代にモンゴル語教育を全面的に支えられた。

一方、日本人専任教員としては、モージンガ先生にモンゴル語を師事した、蒙古語部第1回卒業生の精松源一氏が1925年3月卒業後、1929年7月から1968年3月までの40年近くの長きにわたり、本学のモンゴル語教育のまさに重鎮として、「大阪に精松あり」の名を国内外に轟かせた。ただし、精松先生の本学赴任前の草創期に、篤淵一、鈴江萬太郎の両先生が短期間ではあるが、実際に専任教員であったことは、記憶に留めるべきであろう。精松先生とともに、1947年から1952年までの戦後5年間は宇野章が、さらに1952年からは荒井伸一が専任教員として赴任し、二名体制でモンゴル語教育を支えられた。1968年に精松先生退官後は、1970年代から1990年代中頃まで荒井伸一、小貫雅男、橋本勝の三人体制で、またその後、1995年からは、橋本勝、



* Shigeki SHIOTANI

1960年1月生まれ
京都大学大学院 文学研究科 言語学専攻
博士後期課程(1991年)
現在、大阪大学 大学院人文学研究科
外国学専攻 教授 文学修士
専門/モンゴル語学、モンゴル口承文芸
TEL: 072-730-5263
E-mail: shiotani.shigeki.hmt@osaka-u.ac.jp



1922年から1950年までの内モンゴル・日本人教員

『大阪外国語大学・大阪大学外国語学部100年史 写真で振り返る100年』、大阪外国語大学創立100周年記念事業委員会(2021年5月)

塩谷茂樹、今岡良子の三人体制で、2007年からは、塩谷茂樹、今岡良子、中嶋善輝の三人体制で、今日に至っている。

1920年代から1940年代末まで、五名の中国内モンゴル出身教員が赴任した後、長らくモンゴル人教員不在の不遇の時代が続いたが、1972年、日本・モンゴル国交樹立後、文化交流協定により、27年間の空白期間を経て、1977年12月に、当時のモンゴル人民共和国（現在のモンゴル国）から初のモンゴル人教師 S. モーモーが赴任し、その後、J. バヤンサン、Ch. バトスレン、B. ルハクワー、D. オトゴンスレン、T. ナムジム、E. プレブジャブ、O. サンボールドジ、B. サラントヤ、D. ザヤバートル、M. オーガンバヤル、M. バヤルサイハンに至るまで、合計十二名のモンゴル出身教員が本学のモンゴル語教育に尽力された。

モンゴル語教育の特徴

13世紀のチンギスハーン時代以降、モンゴル民族の固有の文字として「ウイグル式モンゴル文字」（以下、単に「モンゴル文字」とする。縦書きで、左から右へ書写する文字）を登用してきた歴史があり、近代以降、中国のモンゴル族の居住する地域（内モンゴル自治区、甘粛・青海省等）を中心に現在でもなお使用されている一方、モンゴルでは、社会主義時代のモンゴル人民共和国（1924年～1992年）の時期、識字率の向上と教育重視の理念の下、1930年代の「ラテン文字」期を経て、1941年の文字改革により、「モンゴル文字」からソ連の「キリル文字」（横書きで、左から右へ書写する文字）に移行（実際には5年間の試行期間を経て、すべての出版物がキリル文字で表記されるようになったのは1946年からである）し、民主化以降の「モンゴル国」（1992年～現在まで）の時期は、「キリル文字」を基本としながらも、学校教育では「モンゴル文字」を採用する等、2025年の「モンゴル文字」の正式な公用文字化に向けて、懸命な取り組みがなされている。

かかる状況下で、本学モンゴル語専攻100年の言語教育の歴史と言え、唯一「モンゴル文字」教育の時代（1920年代から1950年初頭までのおよそ30年）とその後の「モンゴル文字・キリル文字併用」教育の時代（1950年初頭から現在に至るおよ

そ70年）の二つに大別できる。概して言えば、モンゴル文字は、13世紀当時の古い時代の発音を表した「歴史的綴り字」であり、現在の話し言葉と隔たりが大きいのに対し、キリル文字は、現在の発音により近い「口語的綴り字」という特徴があり、唯一「モンゴル文字」教育の時代にモンゴル語を学んだ当時の学生にとって、モンゴル語の話し言葉（口語）の基礎知識なくして、モンゴル文字を単独で学習することは、まさに至難の業であったに違いない。

また、唯一「モンゴル文字」時代と「モンゴル文字・キリル文字併用」時代のモンゴル語教育の根本的な違いは、前者が中国内モンゴル出身のモンゴル人教師であったため、モンゴル語内モンゴル方言による教育であったのに対し、後者が1950年代初頭の移行期（本学では、どうも1950年頃からキリル文字教育が始まったようである）では、確かに内モンゴル方言とモンゴル語ハルハ方言（本国の標準語であり公用語でもある）の混用があった可能性はあるが、その後、比較的早期に現行のキリル文字教育に移行していったことは想像に難くない。

基本的に両者の違いは、母音・子音の音声面、使用単語の語彙面、名詞格語尾・動詞語尾等の文法面、その他多岐に渡る。例えば、専攻語の名称は、この100年間日本語で、蒙古語部・蒙古科・蒙古語学科・モンゴル語学科・モンゴル語専攻へと時代とともに様々に変化を遂げているが、現在のモンゴル語では、モンゴル国内外や使用文字を問わず、「モンゴルヘルニー アンギ（“モンゴル言語のクラス”の意）」と呼び共通しているが、少なくとも草創期である20年代から新制大学移行前の50年代初頭の専門学校時代には、当時の卒業アルバムやその他資料に、モンゴル文字で「モンゴル ウギーン アイマグ（“モンゴル単語の部類”の意）」と記載されており、当時の呼称が現行のモンゴル語と異なっているのが確認される。

本国でのキリル文字移行から遅れること4、5年で、「新文字」（キリル文字のこと。筆者が学生だった1970年代後半から1980年代前半はもちろんのこと、少なくとも1992年の民主化移行時期頃までは、本学の教育ではそのように読んでいた記憶がある。一方、モンゴル文字は長らく「旧文字」と呼んでいた）教育が始まった背景には、当時の学生たちから教員に対し、キリル文字教育の要望が挙がったことが強

く影響したようだ。しかし、その一方で、社会主義と資本主義の壁により、本国からキリル文字出版物の入手が極めて困難であったため、当時精松先生が本国の文部大臣や著名なモンゴル語研究者たちに、キリル文字出版物送付の催促を手紙で何度も依頼された話は国内外でよく耳にした事実であり、教育の変革期での並みならぬ苦勞がうかがい知られる。

モンゴル語専攻の過去と現在

本学モンゴル語専攻の過去 100 年の卒業生の総数は、大阪外国語学校・大阪外事専門学校の 325 名、その後、大阪外国語大学のおよそ 640 名、統合後大阪大学の 210 名余り（2021 年 3 月時点）を合計すると、1200 名近くにも及ぶ。過去を振り返ると、戦前「満蒙大陸進出」という国策と相まって、皮肉にもモンゴル語教育が注目を浴びた最も苦難に満ちた激動の時代に、卒業後間もなく大陸で殉死した 5 名の卒業生のうち 4 名が蒙古語部卒であったこと、また殉死者の御霊を祀るため、1938 年 6 月 5 日「烈士之碑」が建立された過去の歴史を我々は決して忘れてはならない。また 1922 年、石濱純太郎氏が、蒙古語部初の選科生として精松先生と席を共にされ、後年著名な東洋史学者として活躍されたが、その蔵書が本学に「石濱文庫」として所蔵されていることは、つとに有名である。さらに、1944 年 9 月卒の福田定一氏、後の作家司馬遼太郎を輩出し、後世に「司馬文学」として多大な功績を残した。

戦前の専門学校時代や新制大学の初期の時代には、モンゴル語は一時期隔年募集であったこと、新制大学前は、すべて男子学生であったこと等が特徴であったが、現在では定員 18 名で毎年募集、男女比もほぼ半々である。さらに、大学院（修士 2 年、博士課程 3 年）では日本人学生のほか、中国やモンゴル国からのモンゴル人留学生がその 8 割を占めている。また、外国語学部では、モンゴル語以外の他専攻の学部生でも、地域系科目として提供されている 3、4 年のモンゴル語科目の履修が可能なほか、大阪大学・全学共通教育では、外国語学部以外の学生でも、モンゴル語やモンゴルの文化と社会に関する科目が履修できるよう配慮されている。

本学のシンボル

本学 100 年のシンボルと言えば、前述した「烈士

之碑」（1938 年 6 月 5 日建立）、「世界時計」（1999 年 11 月 11 日設置、箕面移転 20 周年の記念モニュメント）、及び「世界言語銘板型レリーフ」（2021 年 4 月 1 日設置）の三点であろう。



烈士之碑

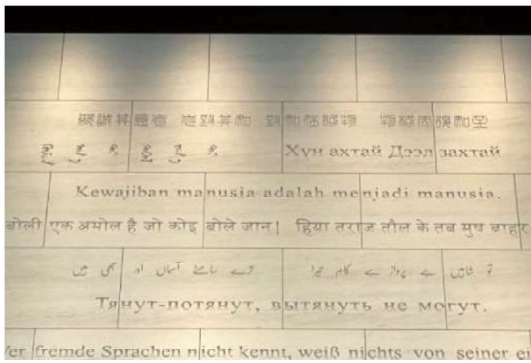


世界時計

このうち、創立 100 周年記念に設置された「世界言語銘板型レリーフ」は、箕面船場キャンパス外国語研究講義棟 1 階エントランスに入ると、正面に日本語を含む世界 25 言語による巨大で重厚な銘板型レリーフ（石割 & 文字入れ）がそびえ立っている。

創立 100 周年を飾るモンゴル語専攻の教訓として、筆者は、13 世紀前半に著作されたチンギスハーンの一伝記、最古の口語文獻『モンゴル秘史』（『元朝秘史』）33 節より、...beye teri' ütü de' el jaqatu...（体に頭あり、衣に襟あり）を厳選し、その後身に当たる現代語 Хүн ахтай Дээл захтай（人に長あり、衣に襟あり）を採用した。これは日本語の「雁に長幼の列あり」と同様、（人間は年長者を敬うべきである）

という意味であり、800年の時空を超えて、我々に相通じるものがある。



世界言語銘板型レリーフ
(上から2列目がモンゴル語：モンゴル文字・キリル文字)

キャンパス 100年の歴史

キャンパスに関しては、戦前・戦中の「上八学舎」(1921年から25年間)、戦禍焼失後、戦後一時期の「高槻学舎」(1946年から5年間)、新制大学で再び「上八学舎」(1951年から27年間5か月)に戻り、その後、「箕面間谷学舎」(1979年9月から41年間6か月)に移転し、さらに創立100周年

を節目に「箕面船場学舎」(2021年から現在まで)と、100年間で四度の移転を経て、今日に至っている。

筆者とモンゴル語

最後に筆者とモンゴル語の関わりを簡単に述べておく。1978年4月大阪外国語大学モンゴル語学科入学し、1年時にモンゴル語キリル文字の授業を、当時75歳で非常勤講師であった精松源一先生に教わったが、その翌年の箕面間谷学舎への移転を契機に一線を退かれ、筆者が精松先生のまさに最後の弟子となった。また、モンゴル文学を荒井伸一先生に、モンゴル言語学を橋本勝先生に教わったほか、奇しくも27年間の空白期間を経て、1977年12月に当時のモンゴル人民共和国から初のモンゴル人教師S. モーモー先生が来日し、筆者はS. モーモー先生の日本での実質最初の弟子となった。モンゴル語を学んで45年、教員としてモンゴル語を教えて28年(非常勤時代を含めると32年)の長きに至った。しかも、キャンパスの移転は、学部1年生入学から2年生前期終了7月までは「上八学舎」、さらに、2年生後期9月から1985年卒業時まで、及び1995年就職時から2021年後期終了3月までは「箕面間谷学舎」、2021年4月から現在までは「箕面船場学舎」と三度の移転を経験したが、これはあたかもモンゴル遊牧民の春は上八宿营地、夏は箕面間谷宿营地、秋は箕面船場宿营地の移動と重なり合って、今後、冬への人生最後の移動が実質どうなるかと夢見ている昨今である。

モンゴル近代文学の父D. ナツァグドルジ(1906年～1937年)が残した名言 Өсөхөөс сурсан үндэсний хэл Мартаж болшгүй соёл (成長と共に学んだ母語、忘却してはならぬ文化)は、まさに「人と言葉と文化」を三位一体とし、人間は生まれ育った母語を大切に守り続けると同時に、その背景にある文化をこよなく愛する必要があるという言葉で、本稿を締めることとする。